AstraZeneca

乳がん・婦人科がんに関する意識調査

2025年10月

アストラゼネカ株式会社

目次

調査概要	P.3
調査結果サマリー	P.4
本調査結果①乳がん検診・婦人科検診の受診状況	P.6
本調査結果②医療機関の受診状況および不正出血の経験	P.16
本調査結果③乳がん・婦人科がんに対する認識および知識	P.23
回答者プロフィール	P.28

調査概要

調査目的	一般女性における、乳がん・婦人科がん（子宮頸がん、卵巣がん、子宮体がん）の検査の受診状況、婦人科系の医療機関受診状況と不正出血の経験の有無の把握および乳がん・婦人科がんに対する認識および知識の把握
調査エリア	全国47都道府県
調査対象者	20～60代のがんに罹患したことのない女性 ※医療従事者を除く
回答者数	n=1000
調査期間	2025年1月17日（金）～ 2025年1月20日（月）
調査機関	株式会社メディリード
調査主体・監修	アストラゼネカ株式会社／リササーナ
参考文献	がん情報サービス　https://ganjoho.jp/public/index.html 公益社団法人 日本産科婦人科学会 婦人科の病気　https://www.jsog.or.jp/citizen/5720/ 公益社団法人 日本婦人科腫瘍学会 市民の皆さまへ　https://jsgo.or.jp/public/

本調査結果サマリー

調査結果サマリー

乳がん検診・婦人科検診の受診状況

- 乳がん検診・婦人科検診の頻度では、全体の42%が検診を「受けたことがない」と回答した。
- 検診を「受けたことがない」と回答した割合は20代の71%が最も高かったが、一般的にがんの罹患率が高くなりはじめる40代以降*においても25～35%が受けていなかった。
- 検診で受けている検査では、「マンモグラフィー」の割合が73%で最も高かった。婦人科がんの検査に限定すると「子宮頸部細胞診」の割合が51%で最も高く、「子宮内膜細胞診」の割合が15%で最も低かった。
- 検診を受ける理由は「病気の早期発見につながると思うから」の割合が58%と最も高く、次いで「年齢的に受けておいた方が良いと思うから」の50%であった。
- 検診を受けていない理由は「必要性を感じないため」の割合が29%と最も高く、次いで「検査に費用がかかる／費用が高い」の25%であった。
- 検診を受けない理由を年代別にみると、40～50代では「検査の痛みが不安・嫌だから」の割合が最も高かった。

＊ 国立がん研究センター がん情報サービス グラフデータベース「年齢階級別罹患率（全国推計値）2015年」
https://gdb.ganjoho.jp/graph_db/gdb1?dataType=30 （2025年５月アクセス時）

参照：P6～15

医療機関受診の状況および不正出血の経験

- 婦人科系で気になる症状があるときに、医療機関を日頃から「受診している」人の割合は全体で32%であった。
- 月経異常では90%、不正出血では88%が「婦人科」を選択したが、それ以外の婦人科がんの症状として考えられる不調を感じた際に受診する診療科で婦人科を選択した人は半数以下であった。
- 医療機関の選択基準は「通いやすさ（家や職場の近くなど）」を重視する人の割合が35%と最も高く、次いで「専門性の高さ」が21%、「医師が女性であること」が20%であった。
- 不正出血の経験があると回答した割合は、20～50代では24～31%だったが、60代以上では9%だった。
- 不正出血を経験した女性の36%は医療機関を受診しなかったと回答しており、年代別でみると20代の46%が最も高く、次いで40代の41%であった。
- 不正出血があった際に受診しなかった理由としては、「様子をみたが、その後症状がなくなった」の割合が60%で最も高く、次いで「受診が必要だと感じなかった」の30%であった。

参照先：P16～22

乳がん・婦人科がんに対する認識および知識

- 子宮内膜細胞診を受けている人においては、69%が子宮体がん*を正しく選択できた一方で、この検査では調べることができない「子宮頸がん」（67%）、 「卵巣がん」（35%）を選択した人がいた。
- いずれのがんにおいても、発症しやすい年齢については38～42%が「わからない」と回答した。
- 子宮体がんのリスク要因については、「わからない」と回答した割合が60%と比較したがん種の中で最も高く、また、いずれのリスク要因についても認知されている割合は15%以下であった。
- 最も認知されていた自覚症状は乳がんの「乳房やわきの下のしこり」の56%であり、最も認知が低かったのは卵巣がん、子宮体がんの「足のむくみ」の5%であった。
- 不正出血が婦人科がんの自覚症状と認知されていたのは、子宮頸がん（37%）、卵巣がん（28%）、子宮体がん（35%）であった。

＊乳がん、婦人科がん（子宮頸がん、卵巣がん、子宮体がん）を調べる検査のうち、公的な予防対策として行われる検診は、乳がん検診、子宮頸がん検診のみであり、卵巣がん、子宮体がんの検査は含まれていません

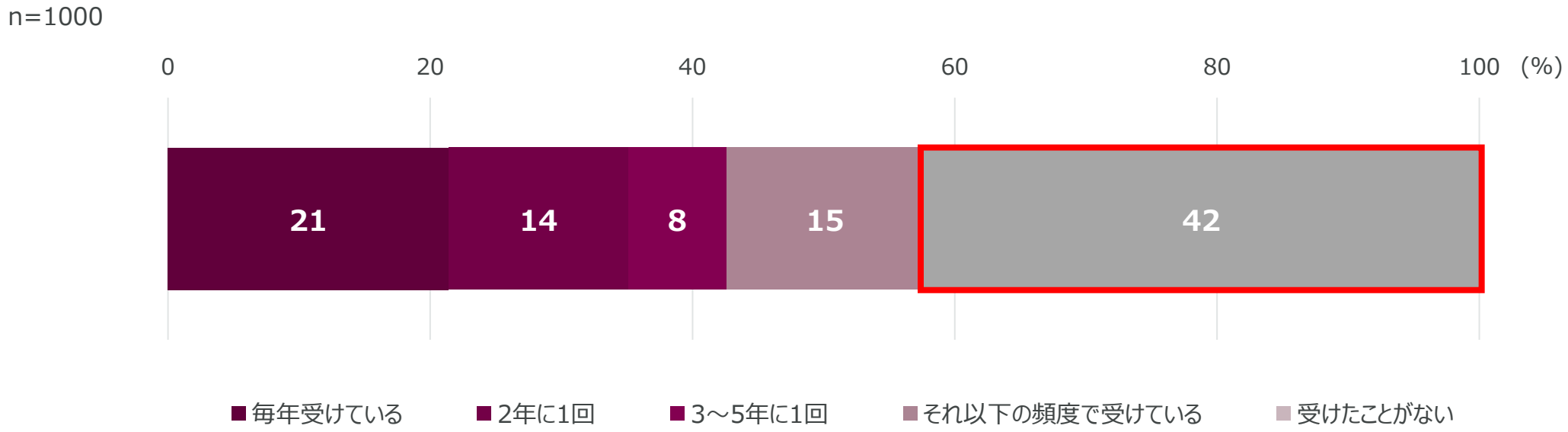
参照先：P23～27

本調査結果①
乳がん検診・婦人科検診の受診状況

乳がん検診・婦人科検診の受診状況

- **乳がん検診・婦人科検診の頻度では、全体の42%が検診を「受けたことがない」と回答した。**

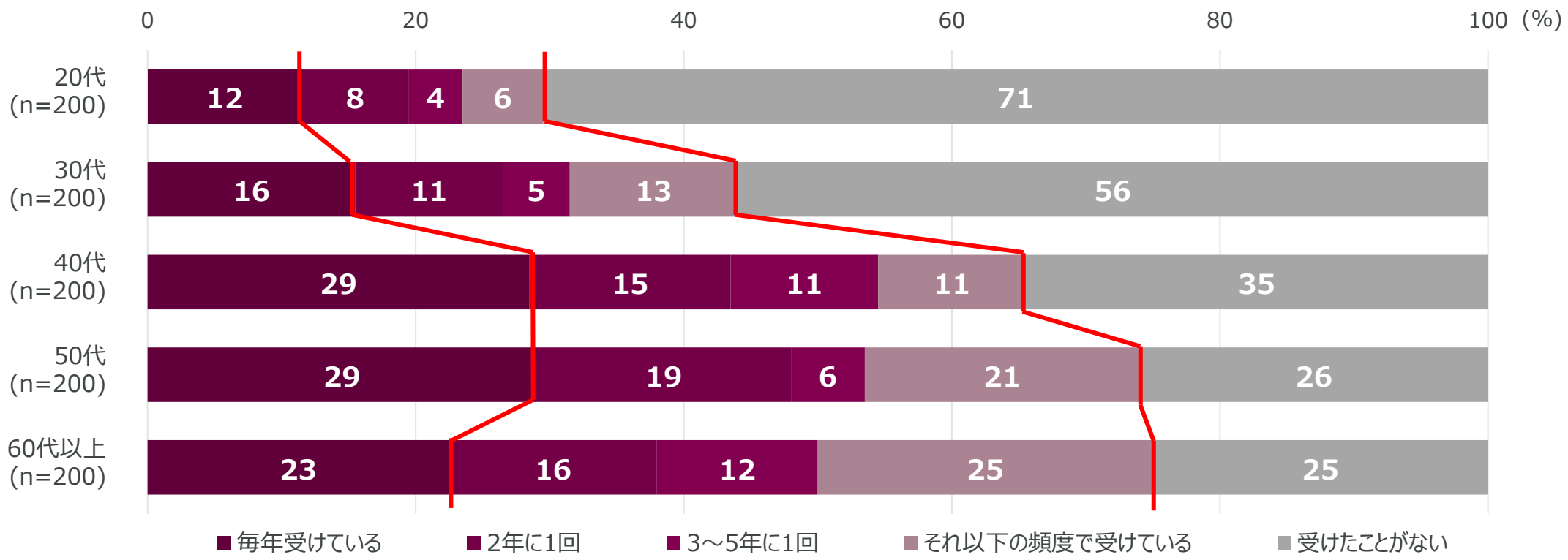
Q あなたは定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けていますか。



乳がん検診・婦人科検診の受診状況（年代別）

- **乳がん検診・婦人科検診を「毎年受けている」割合は40・50代が29%と最も高かった。**
- **乳がん検診・婦人科検診を「受けたことがない」と回答した割合は20代の71%が最も高かったが、一般的にがんの罹患率が高くなりはじめる40代以降においても25～35%が受けていなかった。**

Q あなたは定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けていますか。



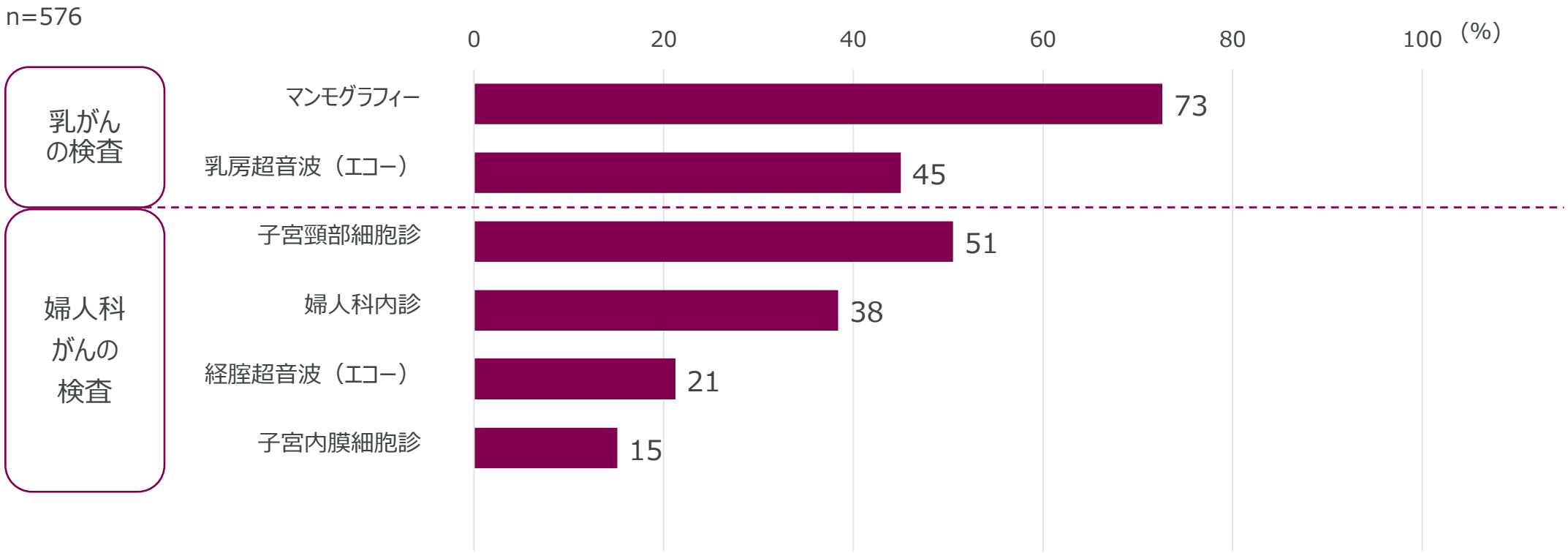
参考： 国立がん研究センター がん情報サービス グラフデータベース「年齢階級別罹患率（全国推計値）2015年」
https://gdb.ganjoho.jp/graph_db/gdb1?dataType=30 （2025年５月アクセス時）

乳がん検診・婦人科検診で受けている検査（種類）

- **乳がん検診・婦人科検診で受けている検査では、「マンモグラフィー」の割合が73%で最も高かった。**
- **婦人科がんの検査に限定すると「子宮頸部細胞診」の割合が51%で最も高く、「子宮内膜細胞診」の割合が15%で最も低かった。**

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診で受けている検査として当てはまるものすべてお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている方のみ回答

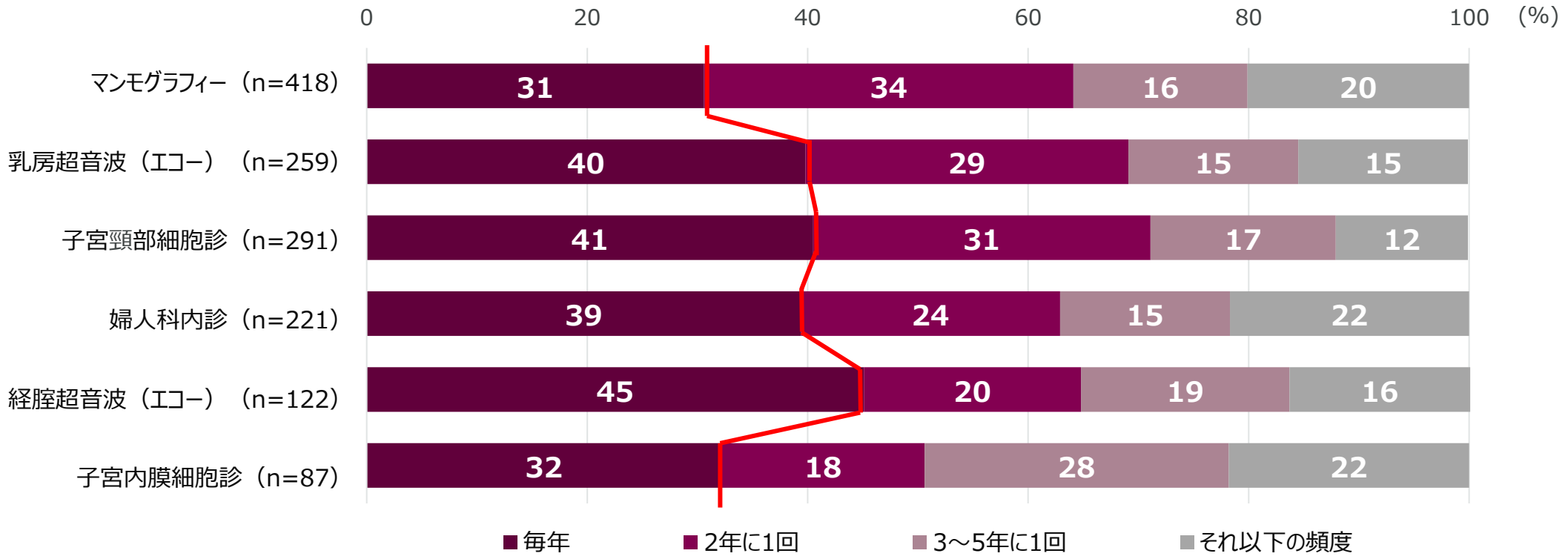


乳がん検診・婦人科検診で受けている検査（受診頻度）

- **定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている人のなかで、「毎年」受けていると回答した人の割合は、いずれの検査も半数に満たなかった（31～45%）。**

Q それぞれどのぐらいの頻度で検査を受けていますか。

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている方のみ回答

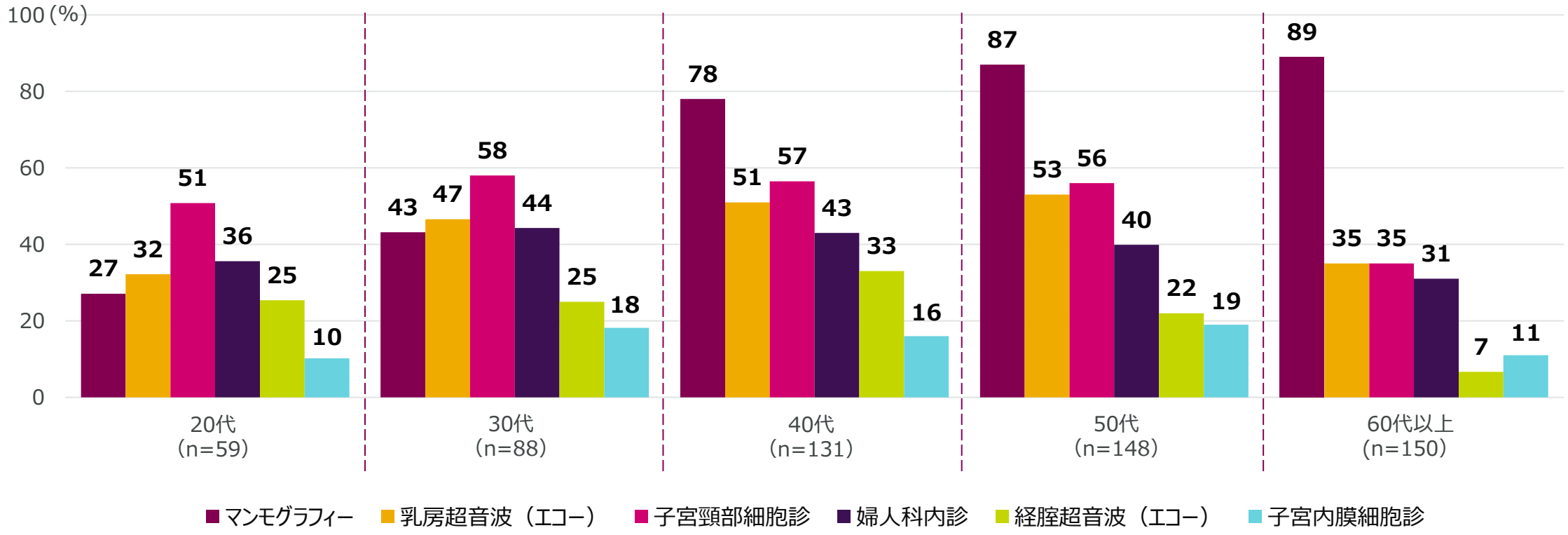


乳がん検診・婦人科検診で受けている検査（年代別）

- 20代、30代は子宮頸部細胞診、40代から60代以上は、マンモグラフィーが最も受けられている検査であった。
- 60代以上においては、マンモグラフィー以外の検査はいずれも35%以下の受診率であった。

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診で受けている検査として当てはまるものすべてお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている方のみ回答

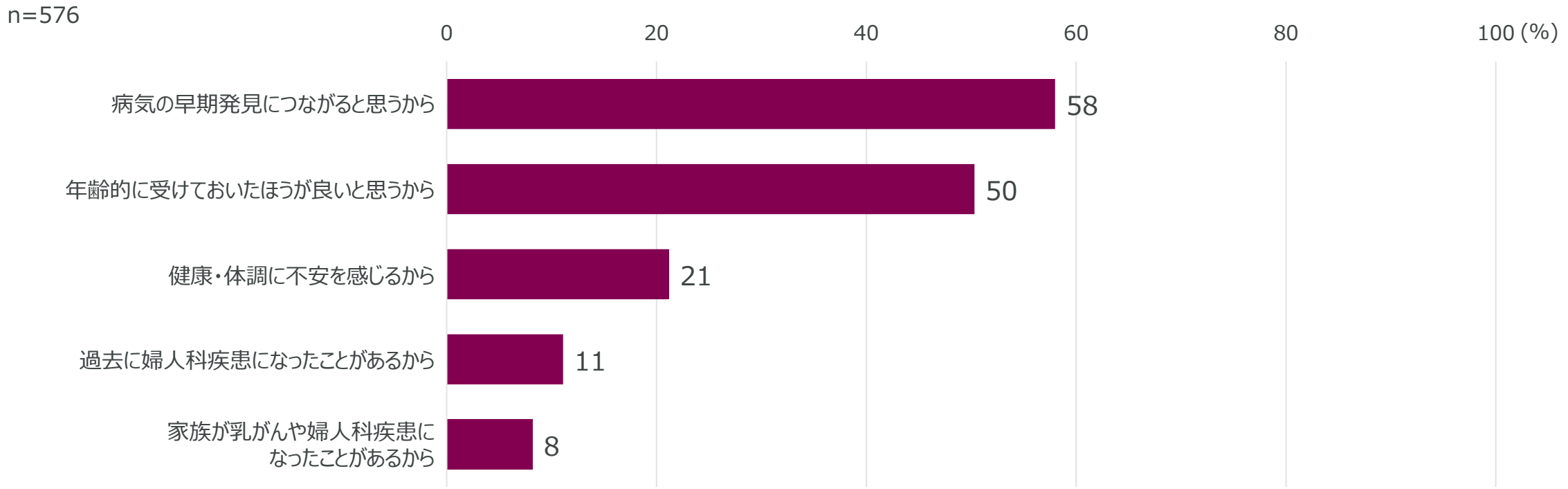


乳がん検診・婦人科検診を受ける理由

- **乳がん検診・婦人科検診を受ける理由は「病気の早期発見につながると思うから」の割合が58%と最も高く、次いで「年齢的に受けておいた方が良いと思うから」の50%であった。**

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診を受けている理由をお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている方のみ回答



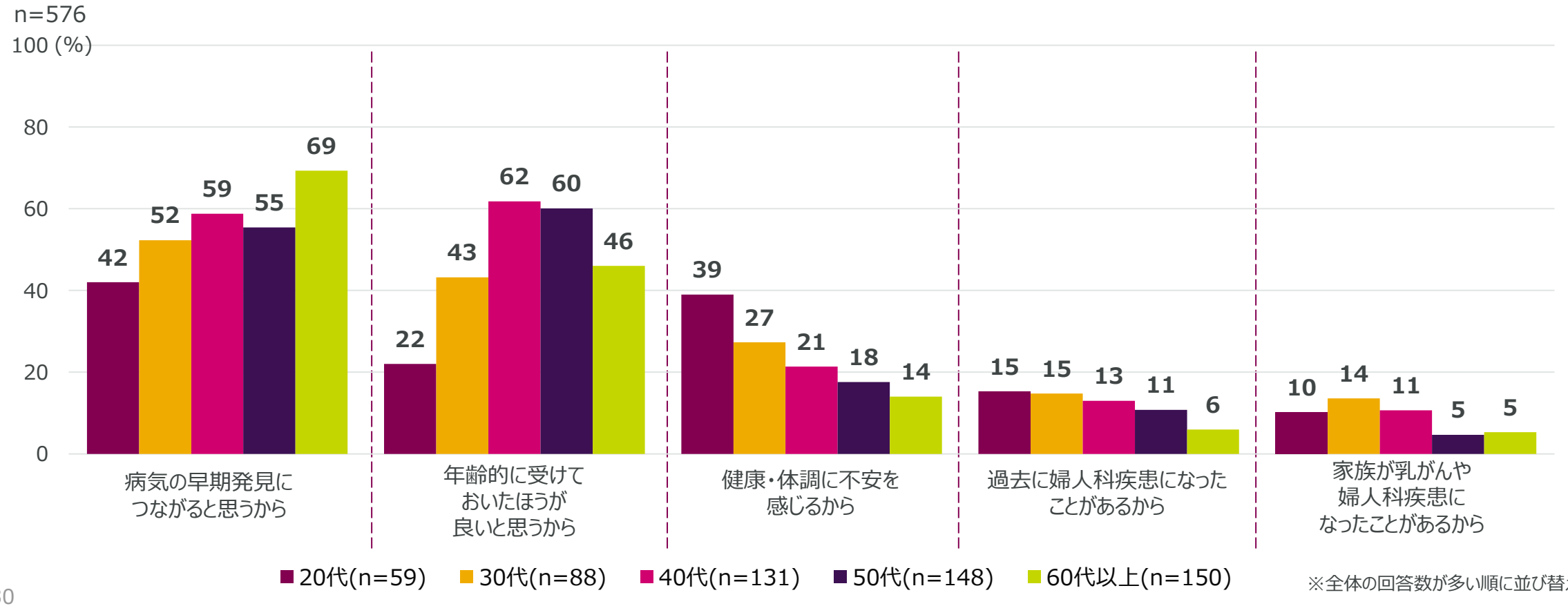
※全体の回答数が多い順に並び替え

乳がん検診・婦人科検診を受ける理由②

- **年代ごとに検診を受けている理由について比較したところ、40代～50代は「年齢的に受けておいたほうが良いと思うから」を選んだ割合が 最も高く（40代 62%、50代 60%）、他の年代では最も割合の高かった「病気の早期発見につながると思うから」よりも選択した人が多かった。**

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診を受けている理由をお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けている方のみ回答



※全体の回答数が多い順に並び替え

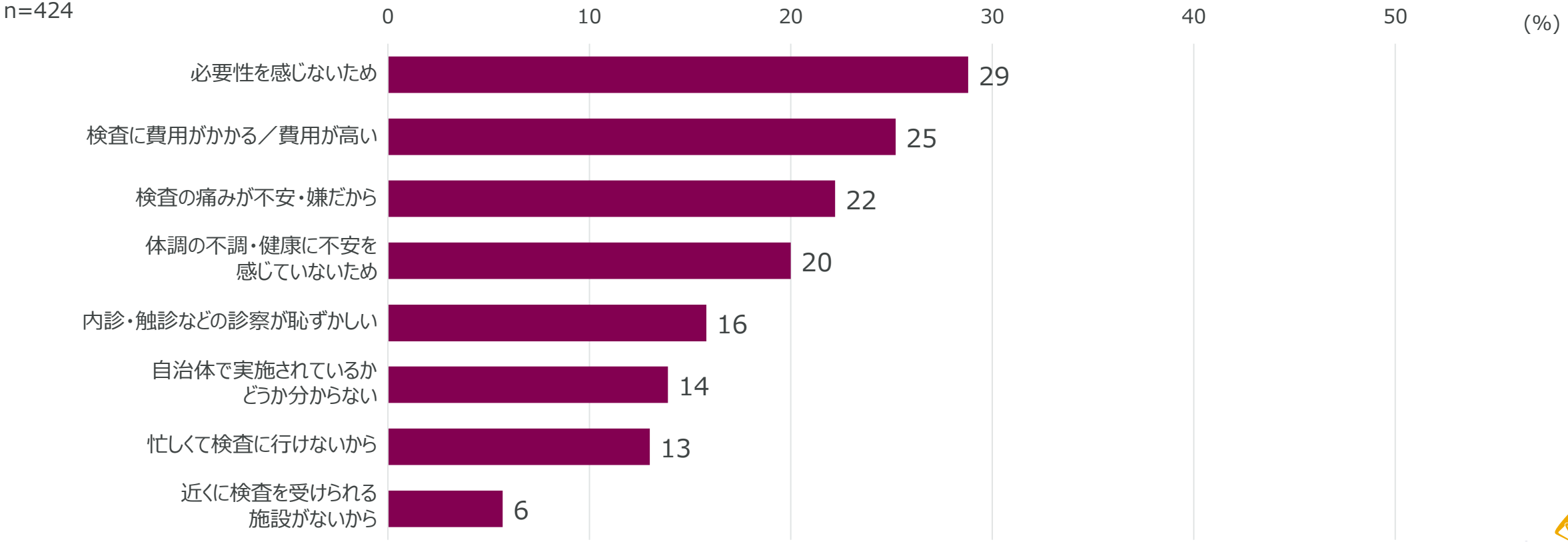
乳がん検診・婦人科検診を受けない理由

- **乳がん検診・婦人科検診を受けていない理由は「必要性を感じないため」の割合が29%と最も高く、次いで「検査に費用がかかる／費用が高い」の25%、「検査の痛みが不安・嫌だから」の22%であった。**

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診を受けていない理由をお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けていない方のみ回答

n=424



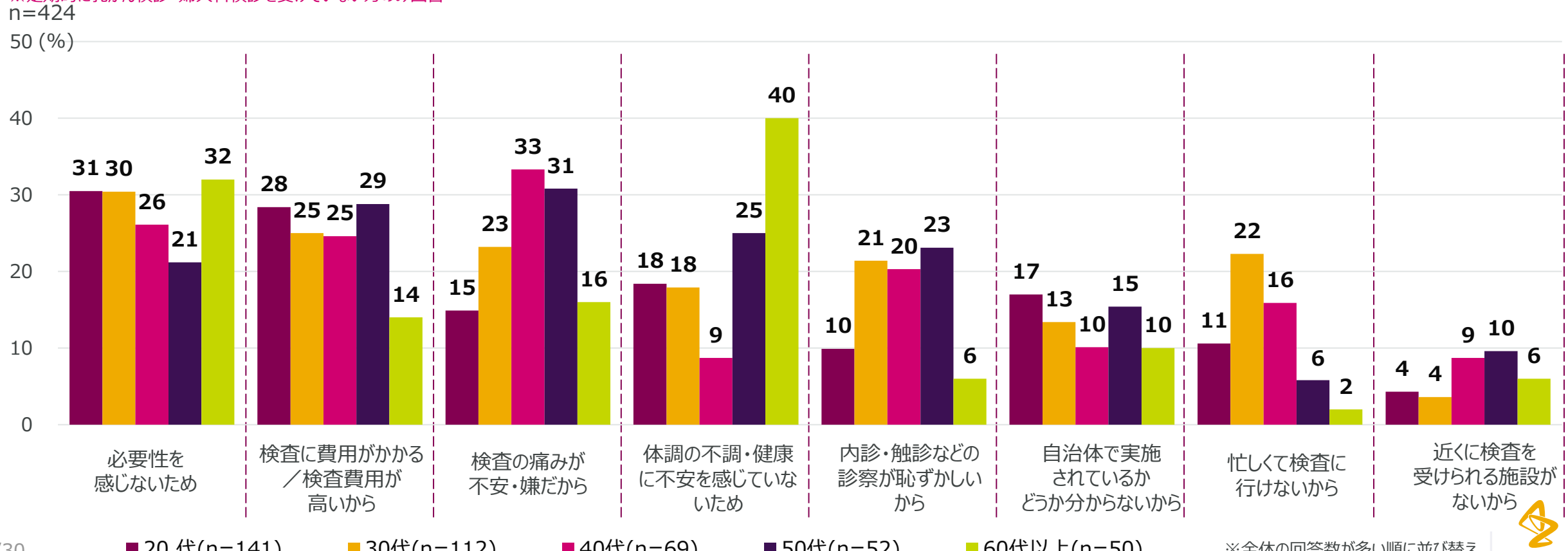
※全体の回答数が多い順に並び替え

乳がん検診・婦人科検診を受けない理由②

- 20～30代では、「必要性を感じないため」の割合が最も高かった。
- 40～50代では、「検査の痛みが不安・嫌だから」の割合が最も高かった。
- 60代以上では、「体調の不調・健康に不安を感じていないため」を選択した人の割合が他の年代と比較して高かった。

Q あなたが乳がん検診・婦人科検診を受けていない理由をお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん検診・婦人科検診を受けていない方のみ回答

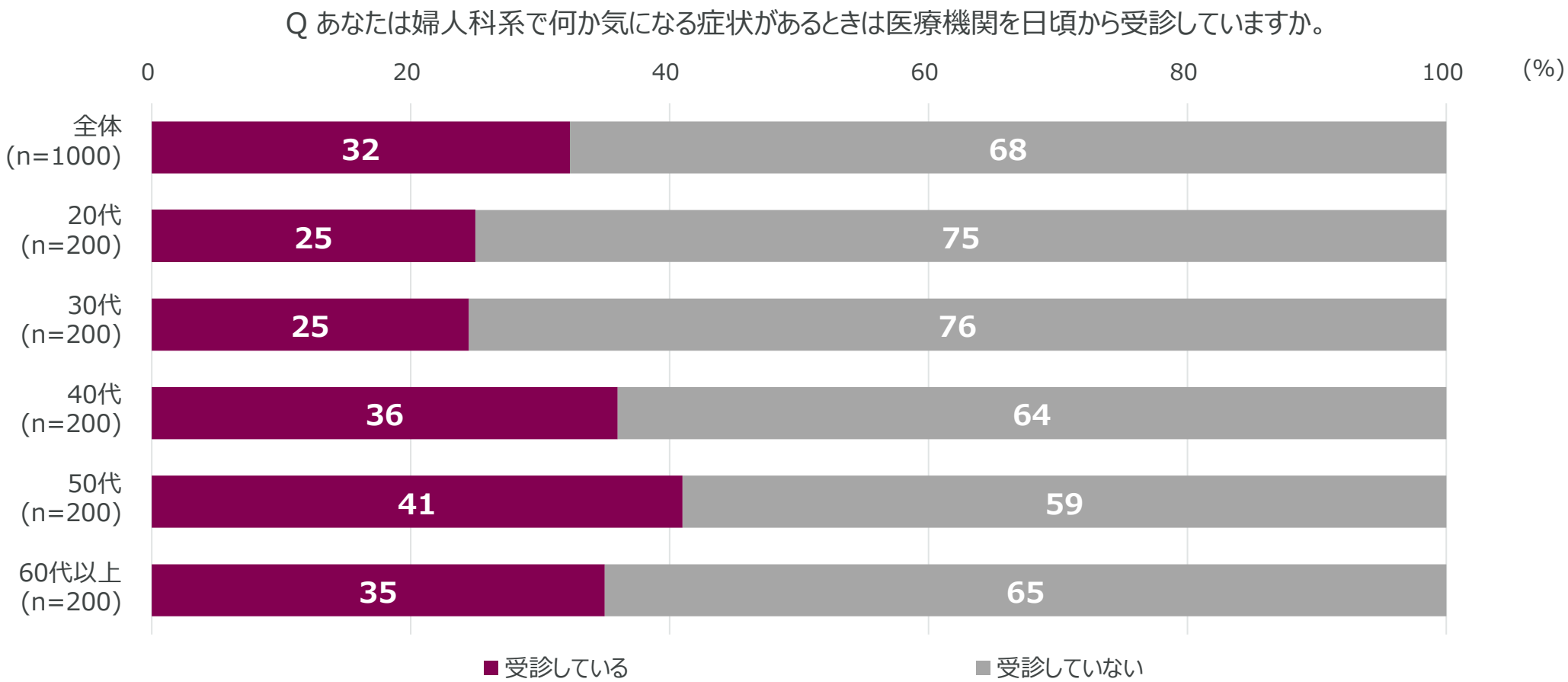


※全体の回答数が多い順に並び替え

本調査結果②
医療機関の受診状況および不正出血の経験

婦人科の受診経験（年代別）

- **婦人科系で気になる症状があるときに、医療機関を日頃から「受診している」人の割合は全体で32%であった。**
- **年代別にみると、「受診している」と回答した割合が最も高かったのは50代の41%だったが、全ての年代において「受診している」の割合は半数以下であった。**

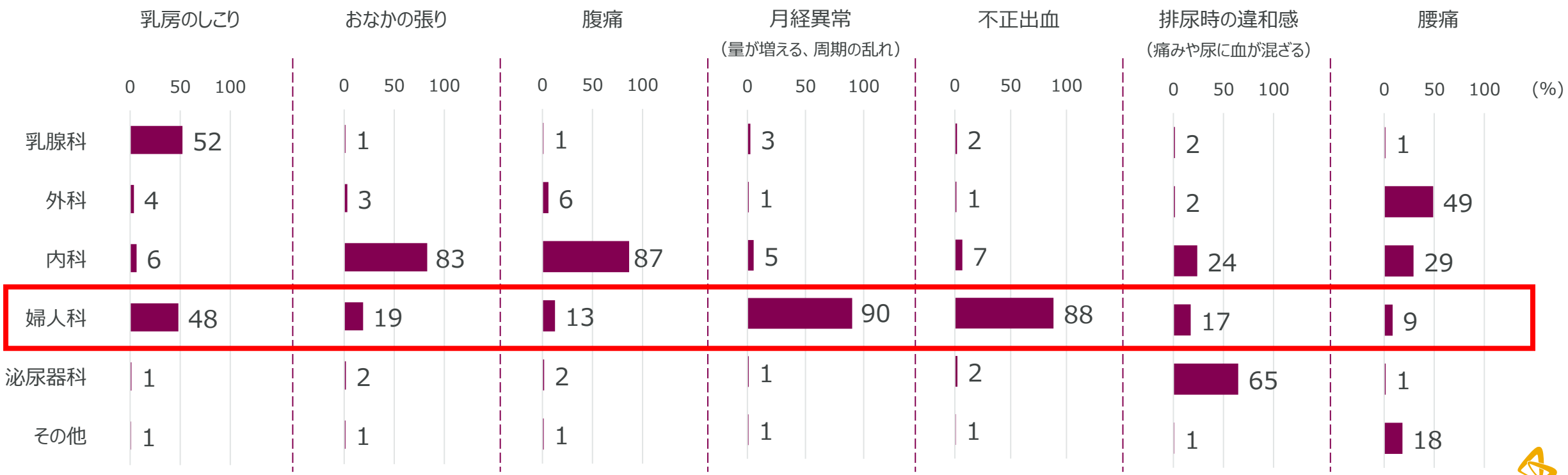


不調を感じた際に受診する診療科

- **月経異常では90%、不正出血では88%が「婦人科」を選択したが、それ以外の婦人科がんの症状として考えられる不調を感じた際に受診する診療科で婦人科を選択した人は半数以下であった。**
- **乳房のしこりがある場合に受診する診療科として、「乳腺科」を正しく選択した人は52%であり、48%の人が「婦人科」を選択した。**

Q 以下の不調を感じた際に受診する診療科をそれぞれお教えください。（複数回答）
※以下の不調を感じたことがない方は、不調を感じた場合に受診すると思われる診療科をお教えください。

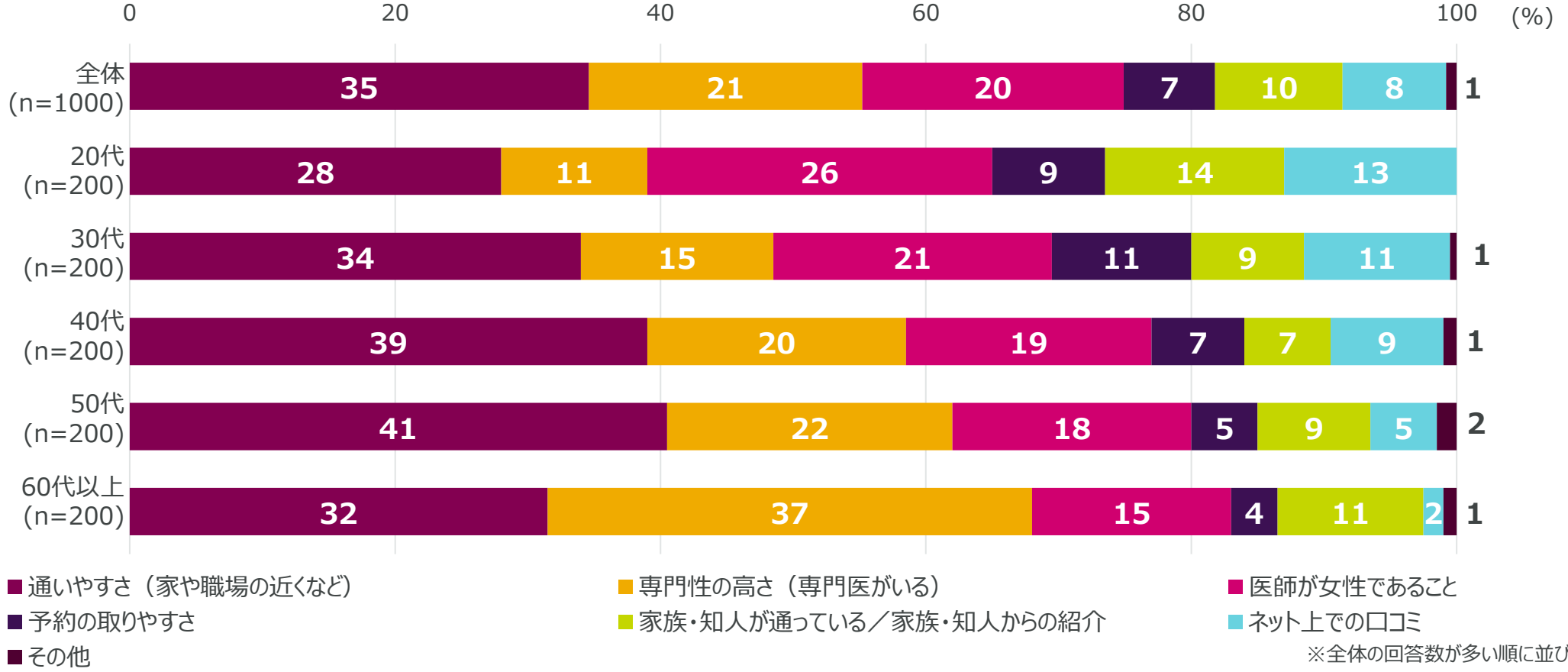
n=1000



医療機関の選択基準

- **医療機関の選択基準は「通いやすさ（家や職場の近くなど）」を重視する人の割合が35%と最も高く、次いで「専門性の高さ」が21%、「医師が女性であること」が20%であった。**
- **20代では「医師が女性であること」を重視する割合が他の年代より高く、60代以上では「専門性の高さ」を重視する割合が高かった。**

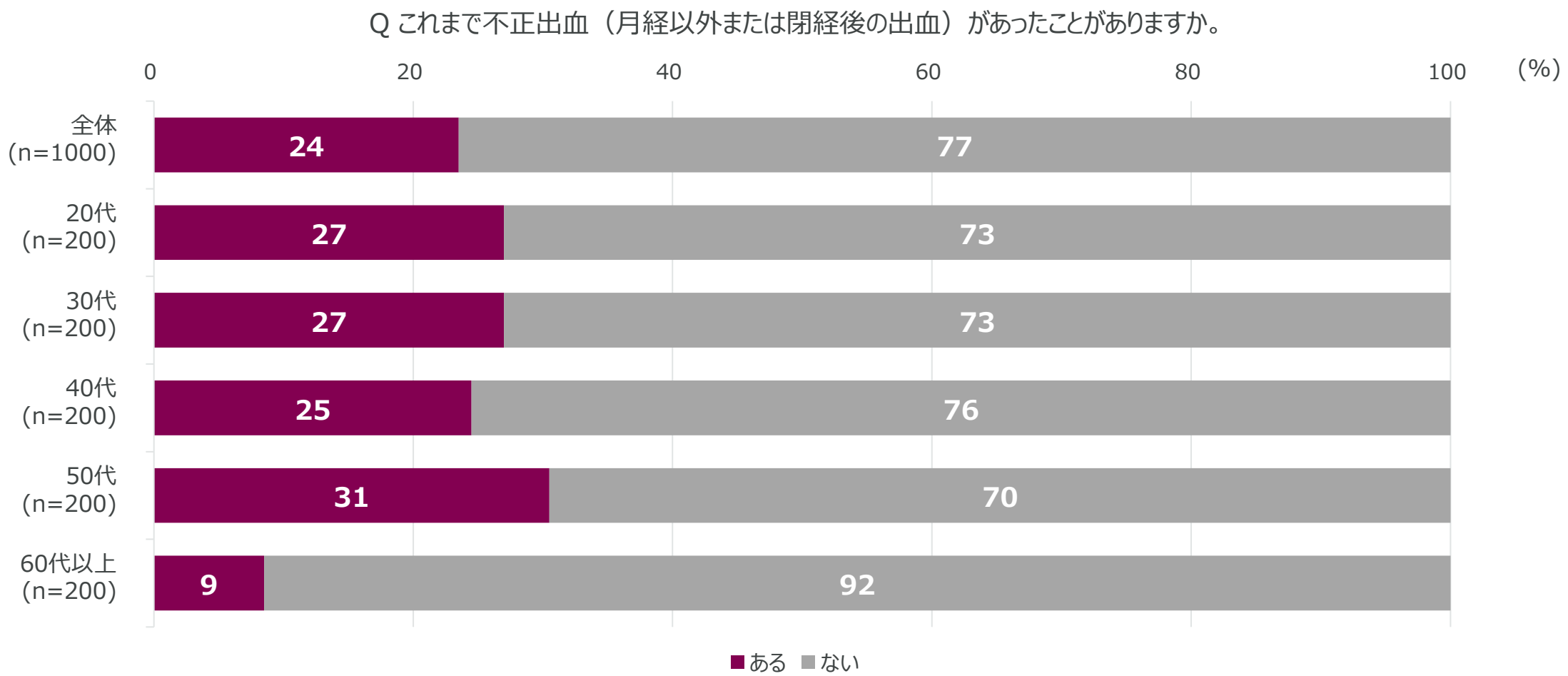
Q 婦人科系で不安を感じて受診する際、何を基準に医療機関を選択されますか。



※全体の回答数が多い順に並び替え

不正出血の経験（年代別）

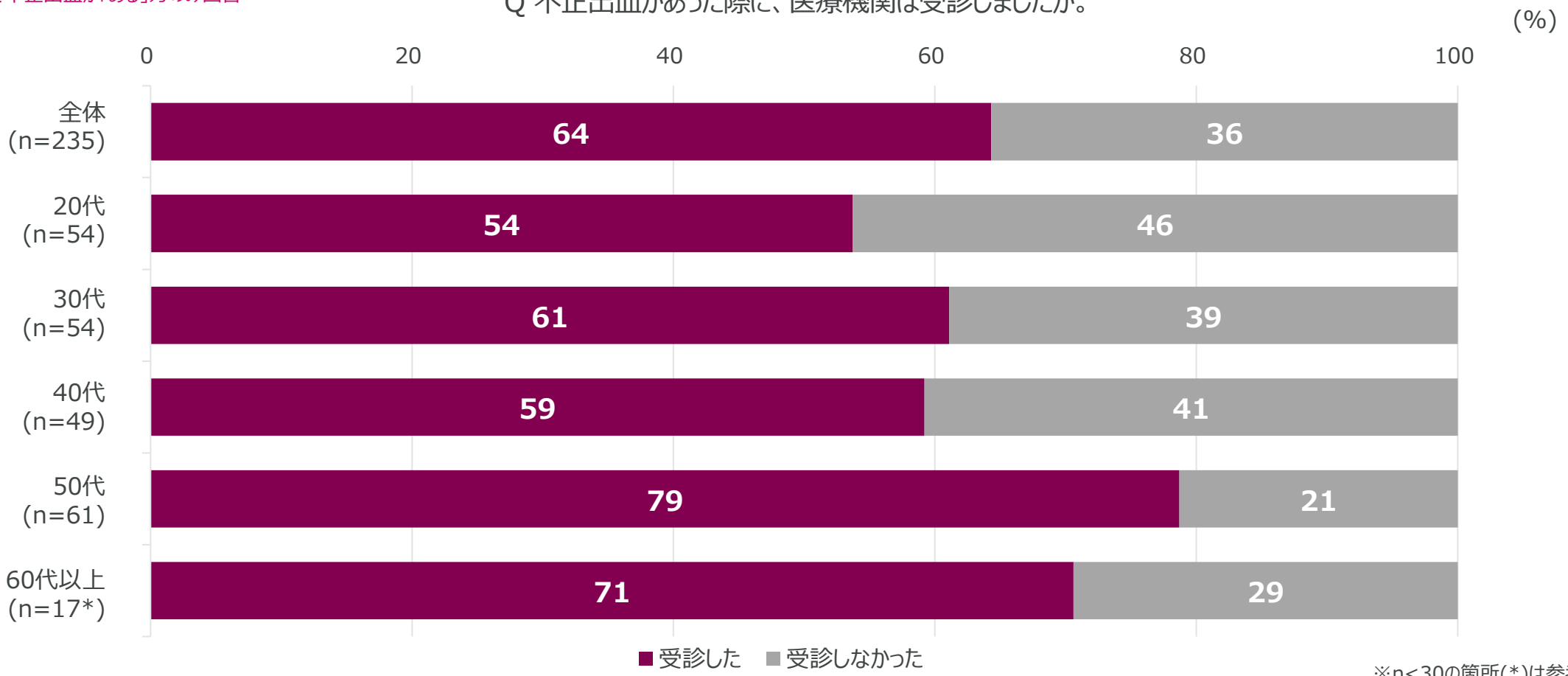
- **不正出血の経験があると回答した割合は、20～50代では24～31%だったが、60代以上では9%だった。**



不正出血時の受診（年代別）

- **不正出血を経験した女性の64%が医療機関を受診したと回答しており、年代別でみると50代が79%と最も高かった。**
- **不正出血を経験した女性の36%は医療機関を受診しなかったと回答しており、年代別でみると20代の46%が最も高く、次いで40代の41%であった。**

※これまで不正出血が「ある」方のみ回答



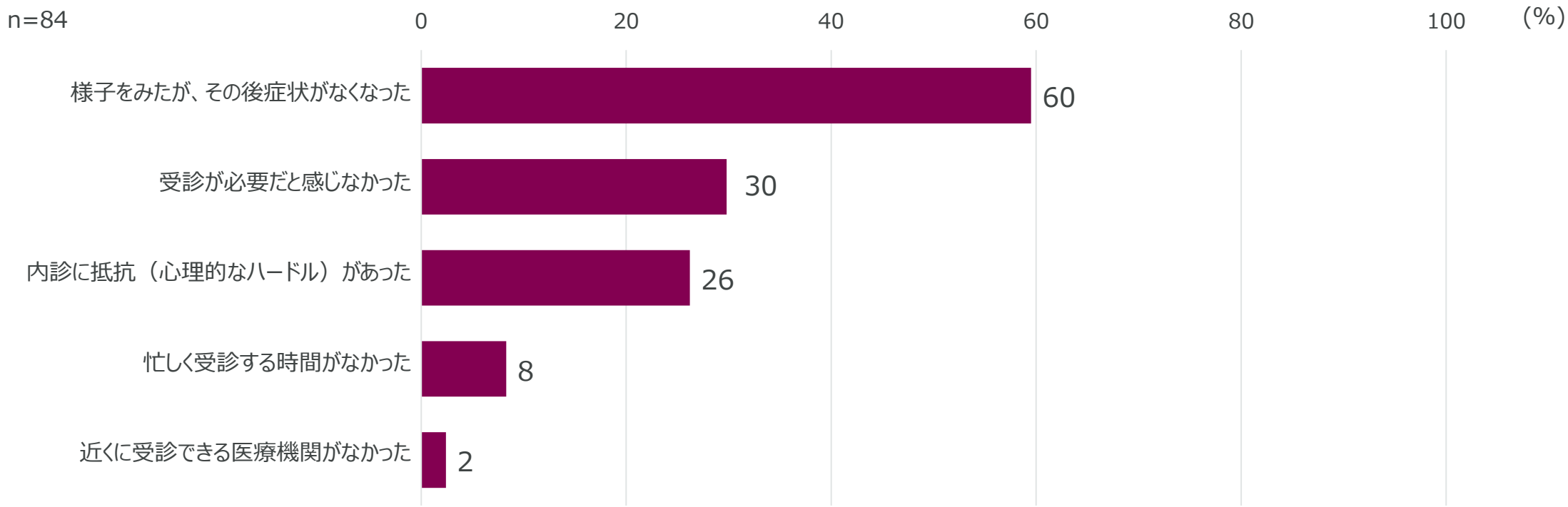
※n<30の箇所(*)は参考値

不正出血があった際に受診しなかった理由

- **不正出血があった際に受診しなかった理由としては、「様子をみたが、その後症状がなくなった」の割合が60%で最も高く、次いで「受診が必要だと感じなかった」の30%であった。**

Q 不正出血があった際に、なぜ医療機関に行かなかったのでしょうか。（複数回答）

※不正出血があった際に「受診しなかった」方のみ回答



※全体の回答数が多い順に並び替え

本調査結果③

乳がん・婦人科がんに対する認識および知識

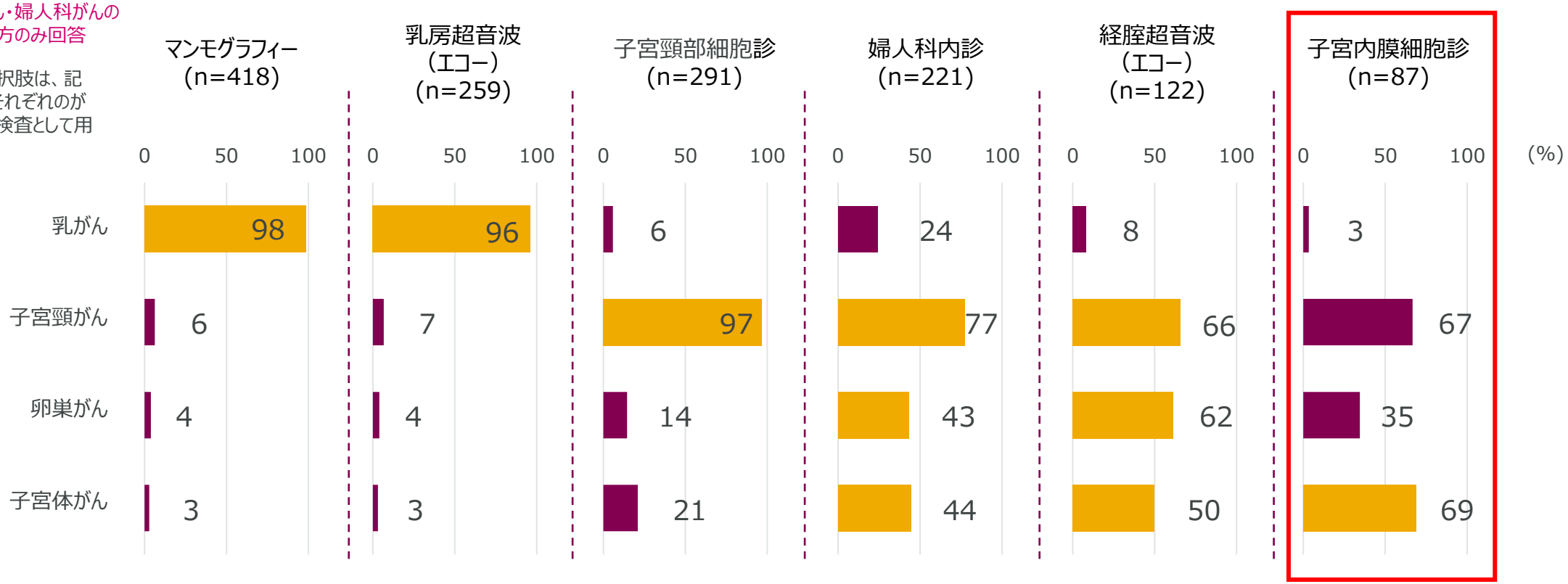
乳がん検診・婦人科検診で調べるがんの認知

- **マンモグラフィー、乳房超音波、子宮頸部細胞診を受診している人の95%以上がその検査で調べるがん種を正しく選択できていた。**
- **子宮内膜細胞診を受けている人においては、69%が子宮体がん*を正しく選択できた一方で、この検査では調べることができない「子宮頸がん」（67%）、 「卵巣がん」（35%）を選択した人がいた。**

Q あなたが受けている婦人科の検査ではどのがんが判明できると思いますか。あなたのお考えにあてはまるものをすべてお教えください。（複数回答）

※定期的に乳がん・婦人科がんの検査を受けている方のみ回答

※黄色グラフの選択肢は、記載の検査方法がそれぞれのがんの診断のための検査として用いられるもの



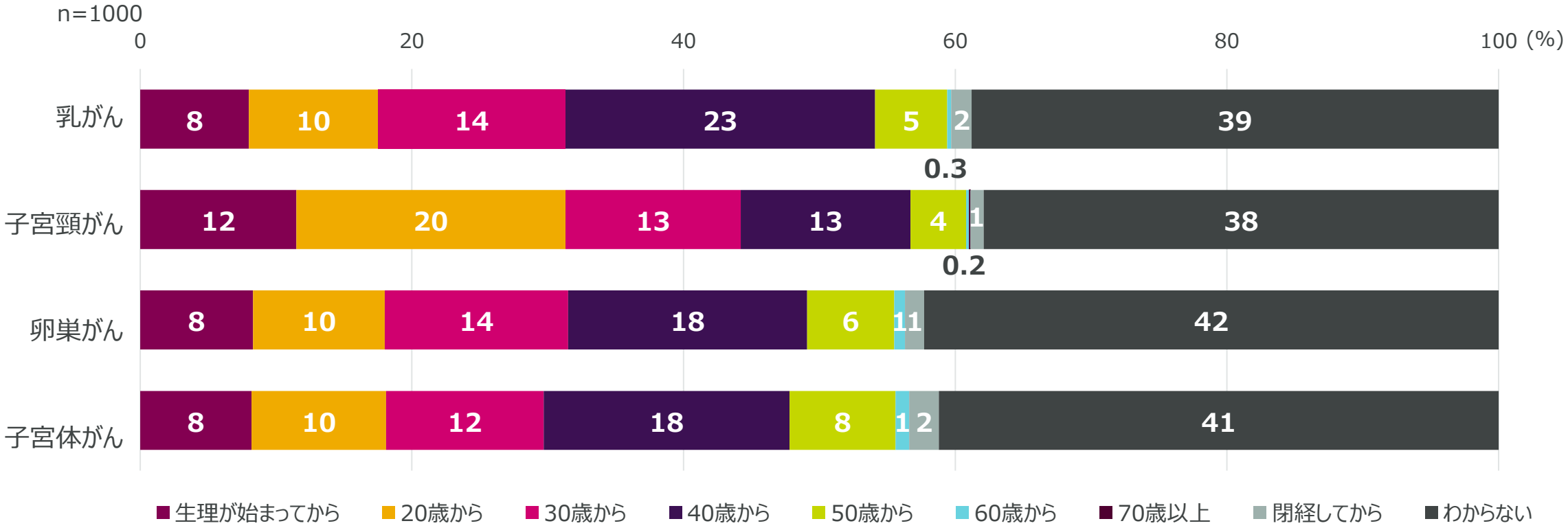
＊ここで示したがん種を調べる検査のうち、公的な予防対策として行われる検診は、乳がん検診、子宮頸がん検診のみであり、卵巣がん、子宮体がんの検査は含まれていません
日本医師会　がん検診とは　https://www.med.or.jp/forest/gankenshin/what/type/

参考：がん情報サービス　https://ganjoho.jp/public/index.html
公益社団法人 日本産科婦人科学会 婦人科の病気　https://www.jsog.or.jp/citizen/5720/
公益社団法人 日本婦人科腫瘍学会 市民の皆さまへ　https://jsgo.or.jp/public/

乳がん・婦人科がんの好発年齢の認知

- **いずれのがんにおいても、発症しやすい年齢については38～42%が「わからない」と回答した。**

Q 乳がん・婦人科がんを発症しやすいのはいつ頃だと思われますか。あなたのお考えに最も当てはまるものをお教えください。



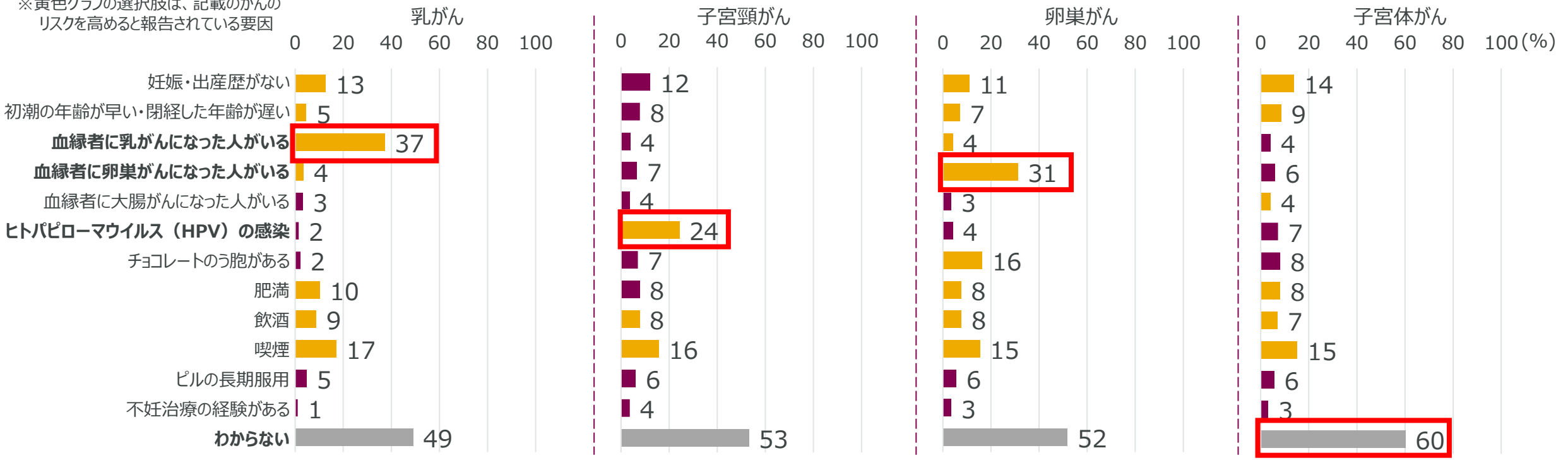
乳がん・婦人科がんのリスク要因の認知

- **最も認知されているリスク要因は乳がんの「血縁者に乳がんになった人がいる」の37%であり、次いで、卵巣がんの「血縁者に卵巣がんになった人がいる」31%、子宮頸がんの「ヒトパピローマウイルスの感染」24%であった。**
- **子宮体がんのリスク要因については、「わからない」と回答した割合が60%と比較したがん種の中で最も高く、また、いずれのリスク要因についても認知されている割合は15%以下であった。**

Q 乳がん・婦人科がんのリスクを特に高めるものとして当てはまると思うものをすべてお教えください。

n=1000

※黄色グラフの選択肢は、記載のがんのリスクを高めると報告されている要因



参考：がん情報サービス https://ganjoho.jp/public/cancer/breast/prevention_screening.html（乳がん）／ https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/cancer/19_ovary.html#anchor1（卵巣がん）
https://ganjoho.jp/public/cancer/cervix_uteri/prevention_screening.html （子宮頸がん）／ https://ganjoho.jp/public/cancer/corpus_uteri/prevention_screening.html（子宮体がん）／がん対策研究所 予防関連プロジェクト「喫煙・受動喫煙と乳がん発生率との関係について」https://epi.ncc.go.jp/jphc/outcome/272.html（卵巣がん）／ 日本産婦人科医会 卵巣チョコレート嚢胞の癌化
https://www.jaog.or.jp/note/%ef%bc%882%ef%bc%89%e5%8d%b5%e5%b7%a3%e3%83%81%e3%83%a7%e3%82%b3%e3%83%ac%e3%83%bc%e3%83%88%e5%9b%8a%e8%83%9e%e3%81%ae%e7%99%8c%e5%8c%96/ ／ Casagrande JT, et al.: INCESSANT OVULATION AND OVARIAN CANCER, Lancet 2:170-173, 1979.

乳がん・婦人科がんの自覚症状に対する認知

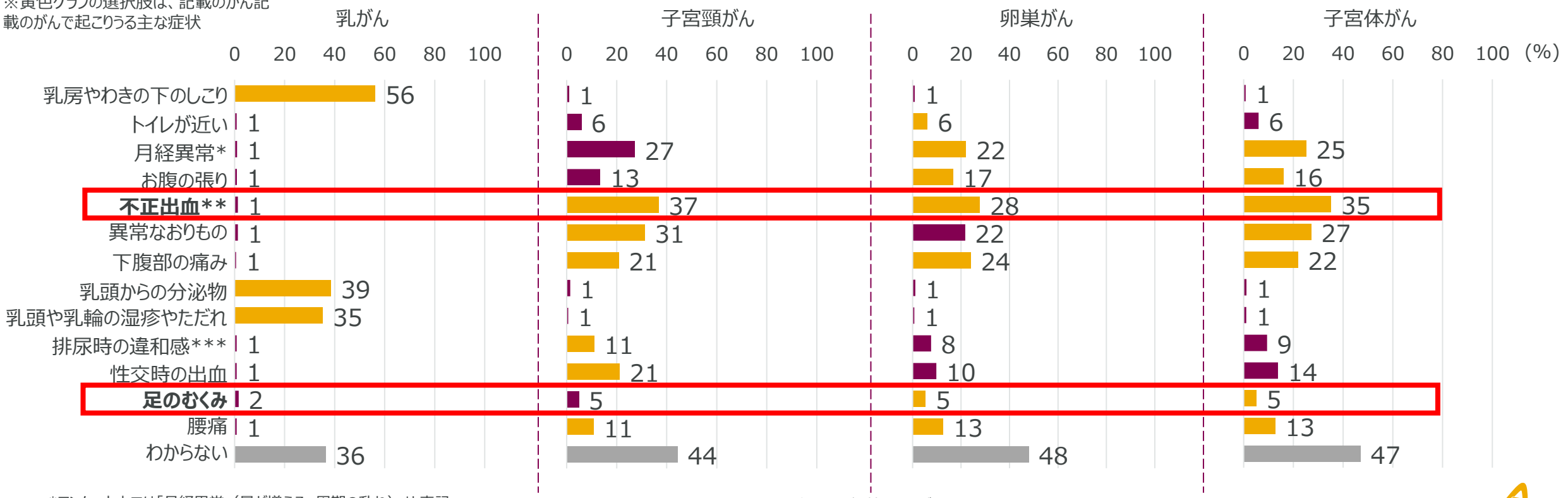
- **最も認知されていた自覚症状は乳がんの「乳房やわきの下のしこり」の56%であり、最も認知が低かったのは卵巣がん、子宮体がんの「足のむくみ」の5%であった。**
- **不正出血が婦人科がんの自覚症状と認知されていたのは、子宮頸がん（37%）、卵巣がん（28%）、子宮体がん（35%）であった。**

n=1000

Q. 乳がん・婦人科がんの自覚症状として当てはまると思うものをすべてお教えください。

※黄色グラフの選択肢は、記載のがん記載のがんで起こりうる主な症状

※黄色グラフの選択肢は、記載のがん発症が考えられる自覚症状

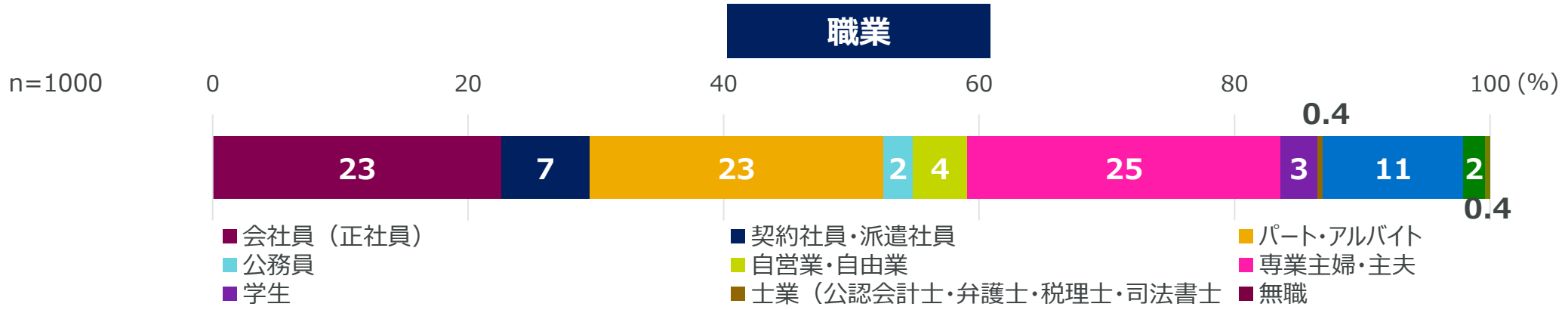


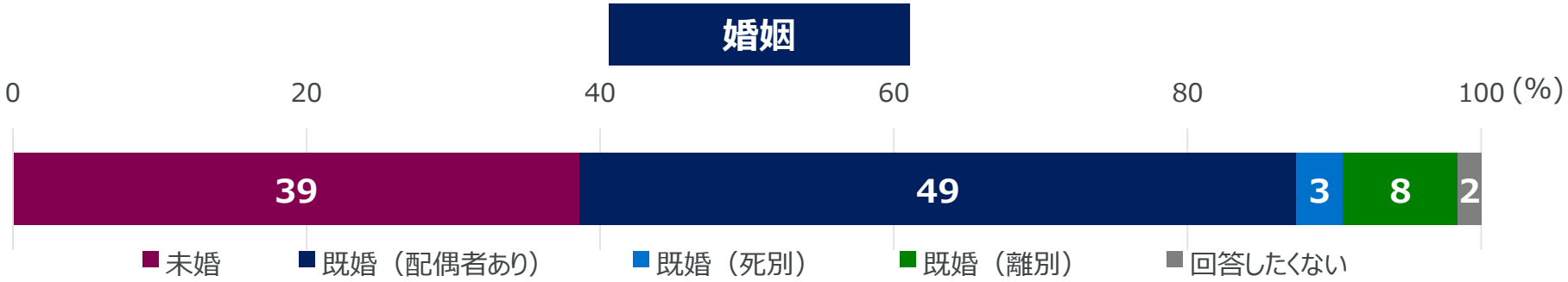
*アンケート上では「月経異常（量が増える、周期の乱れ）」と表記
**アンケート上では「不正出血（月経以外または閉経後の出血）」と表記
***アンケート上では「排尿時の違和感（痛みや尿に血が混ざる」と表記

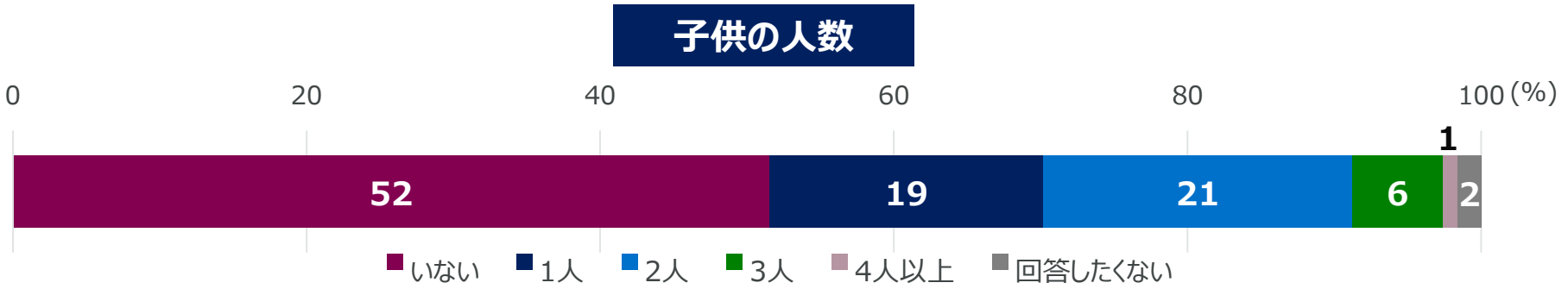
参考：がん情報サービス　https://ganjoho.jp/public/index.html
公益社団法人 日本産科婦人科学会 婦人科の病気　https://www.jsog.or.jp/citizen/5720/
公益社団法人 日本婦人科腫瘍学会 市民の皆さまへ　https://jsgo.or.jp/public/

回答者プロフィール

職業、婚姻状況、子供の人数

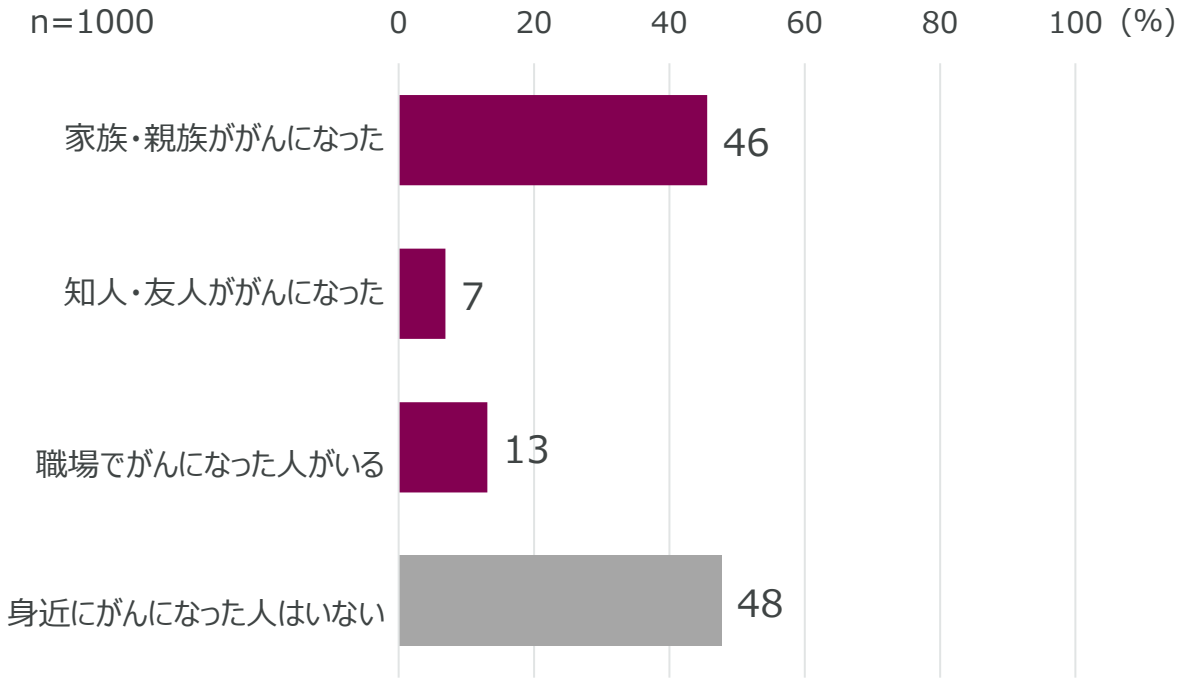






身近な方のがん罹患

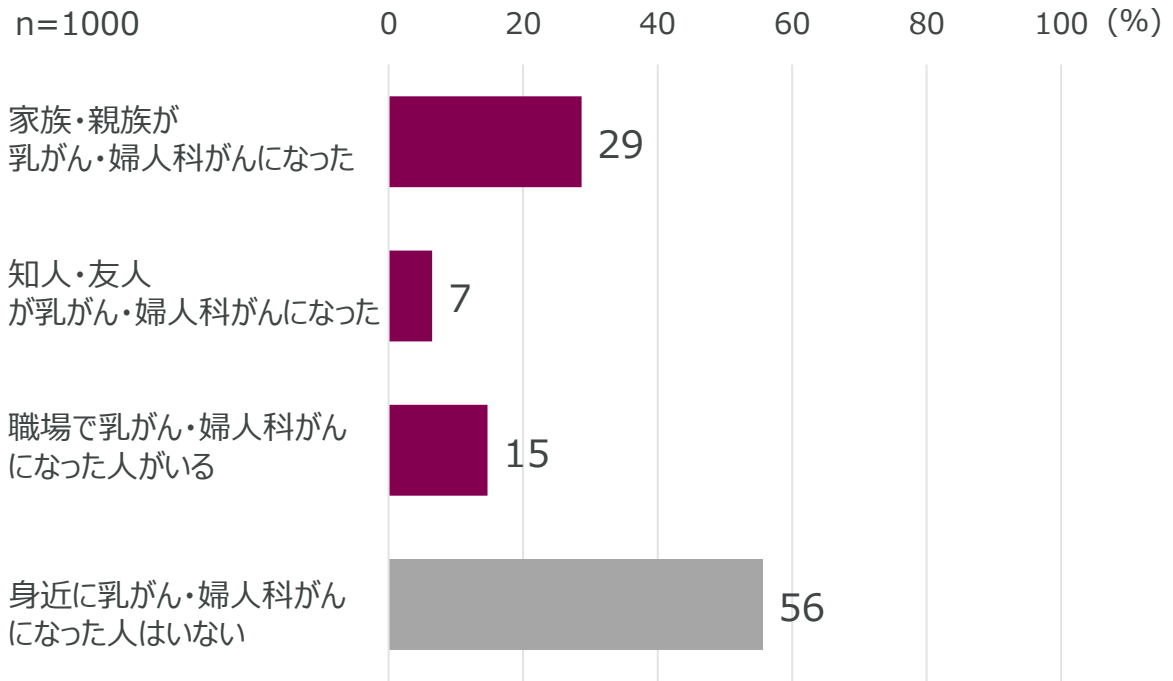
Q あなたの身近な方でがんになった方はいますか。（複数回答）



身近にがんになった人がいる(%)	52

Q あなたの身近な方で乳がん・婦人科がんになった方はいますか。（複数回答）

※婦人科がんの例：卵巣がん、卵管がん、腹膜がん、子宮頸がん、子宮体がん、外陰がん、膣がん等
※身近な方でがんになった方がいる方のみ回答



身近に乳がん・婦人科がんになった人がいる(%)	44

※全体の回答数が多い順に並び替え